

二〇二〇年度、日本内経医学会 日曜講座 第一クラス
三部九候論 復元試案 『素問』第二十篇を底本とし、敦煌文書と併せて再構成。

太字…敦煌文書 「…」…補訂

…移動部分

新校正云…按 全元起本在二第一卷一、篇名『決死生』。

1 黄帝問曰、余、聞ニ『九鍼』於夫子一、衆多博大、不レ可レ勝レ數一。

余、願下聞ニ要道一、以屬ニ子孫一、

傳ニ之後世一、著ニ之骨髓一、藏ニ之肝肺上。

敵血而受、不ニ敢妄泄一。令レ合ニ天道一、必有ニ終始一。

上應ニ天光・星辰・歴紀一、下副ニ四時・五行・貴賤更互一。

冬陰 夏陽、以人應レ之奈何。願 聞ニ其方一。

岐伯對曰、妙乎哉、問也、此天地之至數。

2 帝曰、願下聞ニ天地之至數一、合ニ於人形血氣一、通レ決ニ死生上。爲ニ之奈何一。
岐伯曰、天地之至數、始ニ於一、終ニ於九一焉。

一者天、二者地、三者人、因而三レ之。

三三者九、以應ニ九野一。故人有ニ三部一、部「各」有ニ三候一。

以決ニ死生一、以處ニ百病一、以調ニ虛實一、而 除ニ邪疾一。

解題

・本篇は…人体を上中下の三部に分け、さらに各部を天地の三候に分け…合計すると九候となる。『現代語訳素問』全元起本で…第一卷の第一篇であれば…当時の『素問』の最重要論篇ということになる。 島田隆司
・敦煌卷子医書の D×00613 と P×3287 はロシアとフランスに分蔵…両者は同一卷子から分裂した二部分だった。 沈澍農

1. 主旨

九鍼 …①九鍼十二原篇 ②小鍼 ③九卷

存 …「三部九候爲ニ之原一、九鍼之論不ニ必存一也」 S26
…神聖なものとして大切にしておく。「八正神明論

夫子 …師。先生。年長者。

衆多、博大…(学問内容が)豊富で、広い。

不可勝数…(多すぎて)数えることに耐えられない。

要道 …重要な道理。要点。

属 …つづける。たのむ、まかせる。

敵血 …誓約する際に血をすすする儀式。血盟。

不 敢 …決して〜ない。

天光星辰…太陽や星や星座。天体。

歴紀 …暦や年代 ↓年月や日々の経過。

四時五行貴賤更互…季節の政令・王朝・階級の交替や変遷。

応 …適応する。

至数 …順序。数字の自然法則。

2. 「天地之至数」とは

通 …よく知つていふこと。

決死生…生死を見極める診断。

天地人…三才。天体運行と自然科学と聖人の行い。

「天は陰陽、地は柔剛、人は仁義」『易』説卦伝
除 …はらい清められる。のぞかれる。

D19

D17

帝曰、何謂三部。

岐伯曰、有二下部、有二中部、有二上部。

部各有三候。三候者、有天、有地、有人也。

必指而導之、乃以爲眞。

a

□□、下部之□□□。

□□□、□□□、□□□。

天以候肝、地以候腎、人以候脾胃之氣。

帝曰、中部之候奈何。

岐伯曰、亦有天、亦有地、亦有人。

天以候肺、地以候胸中之氣、人以候心。

帝曰、上部以何候之。

岐伯曰、亦有天、亦有地、亦有人。

天以候頭角之氣、地以候口齒之氣、人以候耳目之氣。

三部者、各有天、各有地、各有人。

D20

3. 「三部九候」上中下の天地人、その診察

候 … 診察、脈診、その箇所。

指 … さししめす。 ↓ 師の指し示す方向。指導。

眞 … 眞の要道。 ↓ 最高の治療法を身につける。

D23

a … この箇所の新校正に云う「詳自上部天至此一段、旧在二当篇之末、義不相接」。此正論。二三部九候、宜処二於斯。今依二皇甫謐『甲乙經』編次例、自二篇末一移置此也。」
□□…この部分、本来は「帝曰、下部之候奈何。岐伯曰、有天、有地、有人」であつたと推測される。

天・地・人…脈診箇所。その比喻表現。

D24

※上部天と足太陰也の位置について（比較資料を参照）

・現行『素問』は、『甲乙』の構成例にならないaの位置に移したとある。

しかし『素問』『太素』の、その前と後の文章は下部・中部・上部の順序であり、aの上部・中部・下部とは逆転している。

・新校正以前の『素問』には、篇末のdに位置していた。『太素』も同じ。

・『敦煌』はcの位置にある。本論の最後尾ということでは旧『素問』『太素』同じ。

・以上を勘案して、本来はbの位置にあつたらうと推測した。

D28

D27

b 上部天、兩額之動脈。上部地、兩頰之動脈。上部人、耳前之動脈。
 中部天、手太陰也。中部地、手陽明也。中部人、手少陰也。
 下部天、足厥陰也。下部地、足少陰也。下部人、足太陰也。

〔此名三部九候也。〕

三部者、天・地・人也。

九候者、部各有上・中・下。故名九也。

三而成天、三而成地、三而成人。
 三而三之、合則爲九。

九分爲九野、九野爲九藏。

故神藏五、形藏四、合爲九藏。

五藏已敗、形藏以竭者、其色必夭。夭必死矣。

帝曰、以候奈何。

岐伯曰、必先度其形之肥瘦、以調其氣之虛實、實則寫之、虛則補之。

必先去其血脉、而後調之。無問其病、以平爲期。

P 28

P 30

P 31

P 01

手陽明…本篇は五陰六陽の古い体系に基づいているために、

まだ「手心主」の概念は無かったのだろう。

『敦煌』注に「少陰は手心主と同じ」とあるのは、

L02 本輸篇や L71 邪客篇の影響を受けたのだろう。

b この三行と次の三行は、文脈を勘案して新たに配置した。

三部者、天地人…この文章は矛盾する。

「三部者上中下也。九候者部各有天地人」が良い。

三而成天…合爲九藏…S09 六節藏象論に同じ文章あり。

三而成天…上・中・下部の三部の、各々に天がきている。

九分…九分割。

神藏…肝・腎・脾(胃)・肺・心

形藏…胸中・頭角・口齒・耳目(王氷)

形藏以竭者…『敦煌』は「刑藏以竭者」に作る。

色…顔色。

夭…若死にする

↓やつれる。損なわれる。枯れる。

4. 「候」診察の概要

形と氣…体形と脈状。

以…そして。

平…凹凸が無く平ら。

↓虚実が調う。

期…百年。長寿。

5

帝曰、決^ク、^{ストハ}二死生^ヲ一奈何。

岐伯曰、形盛^{ナルモ}、^ハ脉細^ハ、^ノ胸中^ノ少^{ナク}氣、^{スル}不足^テ二以息^ハ者、^シ「危」。

形瘦^{ナルモ}、^ハ脉大^ハ、^ノ胸中多^キ氣者、^ス死「也」。

形氣、^{イル}相得者^ハ、^キ生。^{シル}參伍不^レ調者^ハ、^ム病。

三部九候、^{イル}皆「相得者^ハ、^キ生」。^{イル}相失者^ハ、^ス死。

「若」上下左右之脉、^{イシ}相應^キ、^ハ如^キ參春^ハ一者^ハ、^{ダシ}病甚。

「其」上下左右、^{イル}相失^ハ、^カ不可^レ數者^ハ、^ス死。

中部之候、^{イル}雖^ト二獨調^ハ一、^{イル}與^ハ衆藏^ハ一相失者^ハ、^ス死。

中部之候、^{イル}相減者^ハ、^ス死。

目内陷者^ハ、^ス死。

P 03

5. 「決死生」死を見極める診断

危 … 全元起本と『脈経』は「死」に作る。
 得・調・応 ⇄ 失・不調・減
 參伍 … 入りまじる。また、まぜ合わせる。
 參春 … 三つの杵で臼をつく。↓不安定なリズム？ 速い？
 不可數…(少なすぎて)「数えることできない」と読みたい。
 衆藏相失…多くの内蔵とも調和しない。

6. 「九候診」の概要、彈躁診の手順、九候脈診の詳細

何以 … どのような技術を用いれば、

※参考文献

- 『素問』三部九候論 第二十(全元起本 第一卷 決死生)
- 『鍼灸甲乙經』卷之四 三部九候 第三
- 『黄帝内經太素』卷第十四
- 『脈経』卷四 辨三部九候脉証 第一
- 『敦煌文書』:四〇六〜一〇〇四年の記録。一九〇〇年に発見

- 『現代語訳◎黄帝内經素問』東洋学術出版社
- 『黄帝内經素問訳釈』第二版 上海科学技术出版社
- 南京中医学院医經教研組(1961)

- 『素問の葉』丸山昌朗 素問を読む会 1975
- 『敦煌古医籍考釋』馬繼興 江西科学技术出版社 1988
- 『島田隆司素問講座 on Net』1989?

- 『敦煌卷子医書二点の綴合』沈澍農 南京中医薬大学
- 日本医史学雑誌 第63卷第2号 (2017)

P 07

帝曰、何以知^テ二病之所在^ヲ一。

岐伯曰、察^{スル}二九候^ヲ一。

獨小^{ナル}者病。獨大^{ナル}者病。獨疾^キ者病。獨遲^キ者病。

獨熱^キ者病。獨寒^キ者病。獨陷^{スル}下^{スル}者病。

P 05

6

以「左手」、足上、去「足内」踝「上」五寸、「指微」按之。

P 08

「以」右手「指」、當「二」踝「上」微「二」、而彈之。

其「脉中氣疾動」、應過「二」五寸以上、「蠕蠕然者、不病」。

其「氣來」疾、應中「レ」手、渾渾然者、病。

「其氣來」徐、「中」レ手、徐徐然者、病。

其應、上「レ」不「レ」能「レ」至「二」五寸、「彈」之「不」應「レ」手「者」、死。

「其肌」肉身「充」、氣「不」去「來」者、「亦」死。

「其」中部「脉」、乍「踈」乍「數」者、「經亂」矣。亦「死」、若也。

P 13

其「上部」脉、「來」代而「鉤」者、病在「絡脉」也。

九候之相應也、上下若「一」、不「得」二相失「一」。

一候後「者」、則病。二候後「者」、則病甚。三候後「者」、則病危。

P 14

所謂後者、「上中下」應不「俱」也。

察「二」其病藏、「以知」二死生之期「一」。

P 16

必先知「二」經脉、「然後知」二病脉「一」也。

眞藏脉見者、「邪」勝死。

足太陽氣絶者、其足不「可」屈伸「一」。死、必戴眼。

足上 …… 衍文か？
按 …… おさえる。

以右手…『素問』は「庶右手」に作る。
彈 …… (弦を) はじく。

應 …… 手応え。ひびき。反応。
蠕蠕 …… 虫が這うさま。需…濡れて動きが鈍いさま。

渾渾 …… 濁水が湧き出るさま。混混…混乱するさま。
徐徐 …… 静かに落ち着いたさま。

其肌く死…『素問』は「是以脱肉、身不去者、死」に作る。

乍く乍く…したかと思うと、急に…する。
踈・數…まばら・あまた(多数)

代 …… 『代脈、來數中止、不レ能二自還一、因而復動。脈結者生、代者死』『脈經』

鉤 …… L型のカギ「其氣來盛去衰。故曰鉤」S19 玉機眞藏

不得相失…(調和を) 失うことが無い。
俱 …… そろう。ひとしい。↓脈拍の規則性のこと。

察く知…推察して、知る。
病藏 …… 『素問』は「府藏」に作る。
死生之期…死期。余命。

必く然後…必ずくすれば、そのあと
勝死 …… 『甲乙』は「邪勝死」。その注「素問無死字」不可…くすることできず」と読みたい。

戴眼 …… 両眼が上に挙がったまま動かさなくなること。
「上視すること甚しく、定直し動かさる」『類經』

7 帝曰、冬陰夏陽奈何。

P 18

岐伯曰、九候之脉、

皆沈・細・懸絶者、爲陰、主冬。故以夜半死。

〔脉皆〕盛・躁・喘數者、爲陽、主夏。故以日中死。

是故、寒熱病者、以平旦死。

熱中及熱病者、以日中死。

病風者、以日夕死。

病水者、以夜半死。

其脉、乍疎乍數、乍遲乍疾者、日乘四季、死。

P 22

〔若〕形肉已脱、九候雖調、猶死。

七診雖見、九候皆從者、不死。

所言不死者、風氣之病、及經月之病。似二七診之病而非也。故言不死。

若有二七診之病、其脉候亦敗者、死矣。〔死者〕、必發噦噫也。

必〔須〕、審〔諦〕問其所始病。

〔若所〕始之病、與今之所方痛、異者、乃定吉凶。

而後、各切循其脉、視其經絡浮沈、以上下逆順、循之。

其脉疾者、不病也。其脉遲者、病也。

若〔脉不〕往來者、死。皮膚著者、死。

P 25

7. 季節と時間の九候脈、九候と七診、問診法

懸絶…「脈至、即絶、久而不來。故曰「懸絶」。『太素』楊注
喘…「脈至如喘、名曰「暴厥」。暴厥者、不知二與人言」。
數…「脈至如數、使二人暴驚。三四日自巳」。

乘…四頭立ての馬車に乗ること ↓四つに対応する。

四季…季春と季夏と季秋と季冬。各季節の最後の月。

辰(二月)・未(六月)・戌(九月)・丑(十二月)

7～9時・13～15時・19～21時・1～3時

脱…脱力。萎縮。衰弱。

猶…やはり。

七診(之病)…①沈細懸絶病水。②独小独陷下4頁。

『敦煌』は「上七候」に作る。

從…調うこと？

經月…①経の間。②一ヶ月など一定期間。③女性の月経。

『敦煌』は「經間」、「大素」は「經間」に作る。

噦・噫…しゃっくり、えずく。おくび、げっぷ。

須…すべからくべし。

審…詳しく。細かく。|| 諦

定…判定できる。

著…着と通用。皮と骨が付着する。

帝曰、其可^レ治者^{ストハ}奈何^ハ。

岐伯曰、經病者^{ヲムニハ}、治^ス其經^{ノヲ}。

孫絡病者^{ヲムニハ}、治^ス其孫絡血^{ノヲ}。

血病身有^レ痛者^{ミニハ}、治^ス其經・絡^{トヲ}。

其病者^{ノム}、在^{レバ}二奇邪^ニ一、奇邪之脉^ニ、則繆刺^チ之^ス。

留瘦不^{シザレバ}レ移^ラ、節^{すなわち}而刺^ス之^ニ。

上實下虚^{シハ}、切^{シテ}而從^ウ之^ニ。

索^{はたし}二其結絡脉^{ノヲ}一、刺^{シテ}出^{セバ}二其血^{ノヲ}一、以^テ「通^ス其氣^ハ」。

瞳子高者^{キハ}、太陽不足^{ナリ}。

戴眼者^{スルハ}、太陽已絶^{ニユ}。

此決^レ二死生^ノ之要^{ナリ}。不^レ可^レ不^レ察^ル也^ト。

手指及手外踝上五指間^ノ、留^ム鍼^ヲ。

c

c 『敦煌』に「上部天（足太陰也）」の文章があった位置。

8. 奇邪の繆刺、その他の雑病

孫絡…「経脈為裏、支而横者为絡、絡之別者为孫」 L17

浅い脈。「皮毛（孫脈）絡脈（経脈）五蔵」 S63

繆刺…左右対象点への刺法。卍巨刺

「邪客於皮毛、入舍於孫絡、留而不去、閉塞不通。不得入於経、流溢於大絡、而生奇病也。」

邪客大絡者、左注右、右注左、上下左右、

繆刺、以左取右、以右取左。」 S63 繆刺論

奇邪…普通では無い、よこしま。↓本来の位置にない状態。

邪が経に入らず大絡に溢れる。

留瘦…病邪が留まり、やせ衰える。（＝留而不去？）

節…①区切る。②関節。

索…搜と通じ、さがす、もとめる。

以通其氣…『甲乙』に従う。『素問』は「以見通之」に作る。

瞳子…瞳孔。

太陽…太陽経の気。

察…詳察。考察。察知。

不可不察…「察せざることでまず」と読みたい。

手指…編集できなかつた簡冊の断片か？

d …新校正以前の「素問」と『太素』に「上部天（足太

陰也）」の文章があった位置。

三部九候論 比較資料

『敦煌』文書 (原資料)

俄藏吐魯番文獻 (ロシア所蔵トルファン文獻)

Дх. 00613

17 天光星辰歷紀，下副四時五行」

18 聞其方。 岐伯對曰：「妙哉問」

19 九焉。一者天，二者地，三者人，三而」

20 三部各有三候以決死生以處」

21 何謂三部？ 岐伯曰：「有下

22 有天、有地、有人。必指而責 (導) 之」

23 下部之地地 (衍文) 以候腎 下部

24 中部之候奈何？ 岐伯曰：「亦」

25 中部之地地 (衍文) 以候胸中之氣，

26 奈何？ 岐伯曰：「亦有天、地、人」

27 上部之人人 (衍文) 以候耳目之氣， 上部

28 三部者，各有天、地、人，故以」

(下缺)

陳昊 中國人民大學歷史學院

「敦煌醫學文書.P.3287 所見中古醫學書籍的再生產與醫經權威的重構」 22頁

<https://www.academia.edu/41687475>抄撰中的醫書 — 敦煌醫學文書

Pelliot chinois Touen-houang 3287 (トウエン国王図書館ペリオ文書)

Bibliothèque nationale de France Département des Manuscrits

(前缺)

1 各別九之野之者六

2 藏以敗刑藏以竭者其

3 日形感脉細而中氣少不

4 者死也形氣相得者平也

5 色相得者生相失者死若

6 者病也其上下左右相失不

Pelliot chinois Touen-houang 3287

7 岐伯曰察九候獨中六病獨大

8 病獨熱者病獨寒者病脈獨滑者病 以左手去足

9 踝上五寸指微業之以右手指當踝上微而彈之其脉中氣

10 動應過五寸已上常然者不病也 其氣來而中手

11 彈 彈者然者病也 其氣來徐而大不能至五寸彈之不

12 應手者死也 其肌突身充氣不去來者死 其中部脉乍

13 數者輕矣矣死若也其上中部脉未代而

14 者病在絡脉也 九候相應者上下若一不得相失也一

15 後者則病矣二候後者則病甚三候後者則厄矣所謂後

16 者上中下應不俱也察其病藏而知死期必先知經脉然後

17 知病也脉真藏脉見者死是太陽氣絕者足不可屈中

18 死必戴眼冬陰夏陽奈何 岐伯曰九候之脉皆沉細懸

19 絕者為陰也主冬夜半死 脉皆盛躁突數者為陽也

20 主夏日中死 寒熱者平旦死 熱中及熱病者日中死

21 病風者日夕死 病水者夜半死 脉乍疎乍數乍遲乍疾

22 者日乘四季死 若形實以脫九候雖調者必死 上七候

23 雖見九候皆順者不死所以言不死者風氣之病及經開之病

24 似七詆之病而非七也故言不死若有前七詆之病其脉惟

25 之數者則死之者必蒸汗也必瀉審詳回其所始若所始之

26 病与今所痛異者乃定吉凶 循其脉視其經浮沉上下逆

27 順循之其脉疾者不病也其脉遲者病也若脉不往來者

28 死 上部天兩額動脉 上部地兩額動脉 上部人耳前動脉

29 中部天手太陰 中部地手陽明 中部人手少陰 少陰手心主脈同

30 下部天足厥陰 下部地足少陰 下部人足太陰 此若三部

31 九候也三部者天地人也九候者部各有上中下故名也

<https://archivesetmanuscripts.bnf.fr/ark:/12148/cc/119928g>

『敦煌』文書（翻字）

1

天光・星辰・歷紀，下副四時・五行
聞其方。

ロシア所蔵文獻

D17

岐伯對曰、妙哉、問

2

九焉。
一者天、二者地、三者人、三而
三部、各有三候。
以決死生、以處百

D19

3

何謂三部。
岐伯曰、有下
有天、有地、有人
必指而責（導）之、

D20

a

下部之地、地以候腎。 下部
中部之候奈何。
岐伯曰、亦有
中部之地、地以候胸中之氣。
奈何。

D23

b

岐伯曰、亦有天、地、人也。
上部之人、人以候耳目之氣。 上部
三者者、各有天、地、人。
故以、

各別九野、九野藏
藏以敗、刑藏以竭者、其色

ペリオ文書
P 01

5

曰、形盛、脉細、胸中氣少、不
者、死也。

P 03

形氣、相得者、平也。參
色相得者生。相失者死。
若上 者病也。
其上下左右、相失不

6

○岐伯曰、察九候。

P 07

獨小者病。獨大者
獨熱者病。獨寒者病。脉獨陷者病。 病。

○以左手、去足內踝上五寸、指微案之。
以右手指、當踝上微、而彈之。

P 08

其脉中氣（疾）動、應過五寸已上、需ルコト然者、不病也。

其氣來疾、中手、憚ルコト然者、病也。
【需ルコト者、來ルコト有レ力リ也】

其氣來徐徐、
上不能至五寸、彈之不應手者、死也。
【憚ルコト者、來ルコト無レ力リ也】

其肌肉身充、氣不去來者、亦死。
【徐ルコト者、似ルコト有レ、似ルコト無レ也】
【不レ去ルコト來ルコト者、彈ルコト之全無クモ】

其中部脉、乍疎乍數者、經乱矣。亦死若也。 P 13
其上部脉、來代而鉤者、病在絡脉也。

九候相應者、上下若一、不得相失也。 P 14
一候後者、則病矣。二候後者、則病甚。三候後者、則厄矣。
所謂後者、上中下應不俱也。

察其病藏、而知死期。
必先知經脉、然後知病也。 P 16
脉真藏脉見者、亦死、
足太陽氣絕者、足不可屈申。死、必戴眼。

P 16

7

○冬陰 夏陽、奈何。
岐伯曰、九候之脉、
皆沉・細・懸絶者、為陰也。主冬。夜半死。
脉皆盛・躁・栗數者、為陽也。主夏。日中死。
寒熱者、平旦死。
熱中及熱病者、日中死。
病風者、日夕死。病水者、夜半死。
脉、乍疎乍數、乍遲乍疾者、日乘四季、死。

P 18

○若形肉以脫、九候雖調者、亦死。
○上七候雖見、九候皆順者、不死。
所以言不死者、風氣之病、及經閉之病。
似七診之病、而非七也。故言不死。
若有前七診之病、其脉候亦敗者、則死。
死者、必發噦咳也。

P 22

○必須、審諦問、其所始。
若所始之病、与今所痛、異者、乃定吉凶。
循其脉、視其經浮沉、上下逆順、循之。
其脉疾者、不病也。其脉遲者、病也。
若脉不往來者、死。

P 25

3

c. 上部天兩額動脉・上部地兩頰動脉・上部人耳前動脉
中部天手太陰・中部地手陽明・中部人手少陰
下部天足厥陰・下部地足少陰・下部人足太陰
【少陰、手心主脉、同】

P 28

此名三部九候也。
三部者、天地人也。
九候者、部各有上中下、故名九也。 P 30

P 30

『素問』三部九候論 第二十

1 黃帝問曰、余聞『九鍼』於夫子、衆多博大、不可勝數。

余願、聞要道、以屬子孫、

傳之後世、著之骨髓、藏之肝肺。

敵血而受、不敢妄泄。令合天道、必有終始。

上應天光·星辰·歷紀、下副四時·五行·貴賤·更互。

冬陰·夏陽、以人應之奈何。願聞其方。

2 岐伯對曰、妙乎哉、問也、此天地之至數。

帝曰、願聞天地之至數、合於人形血氣、通決死生、爲之奈何。

岐伯曰、天地之至數、始於一、終於九焉。

一者天、二者地、三者人、因而三之。

三三者九、以應九野。故人有三部、部有三候。

以決死生、以處百病、以調虛實、而除邪疾。

3 帝曰、何謂三部。

岐伯曰、有下部、有中部、有上部。

部各有三候。三候者、有天、有地、有人也。

必指而導之、乃以爲眞。

a 上部天、兩額之動脈。上部地、兩頰之動脈。上部人、耳前之動脈。

中部天、手太陰也。中部地、手陽明也。中部人、手少陰也。

下部天、足厥陰也。下部地、足少陰也。下部人、足太陰也。

故下部之、

天以候肝、地以候腎、人以候脾胃之氣。

帝曰、中部之候奈何。

岐伯曰、亦有天、亦有地、亦有人。

天以候肺、地以候胸中之氣、人以候心。

帝曰、上部以何候之。

岐伯曰、亦有天、亦有地、亦有人。

天以候頭角之氣、地以候口齒之氣、人以候耳目之氣。

b 三部者、各有天、各有地、各有人。

三而成天、三而成地、三而成人。三而三之、合則爲九。

九分爲九野、九野爲九藏。

故神藏五、形藏四、合爲九藏。

五藏已敗、其色必夭。天必死矣。

4 帝曰、以候奈何。

岐伯曰、必先度其形之肥瘦、以調其氣之虛實、

實則寫之、虛則補之。

必先去其血脉、而後調之。無問其病、以平爲期。

5 帝曰、決死生奈何。

岐伯曰、形盛、脈細、少氣、不足以息者、危。

形瘦、脈大、胸中多氣者、死。

形氣相得者、生。參伍不調者、病。

三部九候、皆相失者、死。

上下左右之脈、相應、如參春者、病甚。

上下左右、相失、不可數者、死。

中部之候、雖獨調、與衆藏相失者、死。

中部之候、相減者、死。

目內陷者、死。

6 帝曰、何以知病之所在。

岐伯曰、察九候、

獨小者病。獨大者病。獨疾者病。獨遲者病。

獨熱者病。獨寒者病。獨陷下者病。

以左手、足上、上去踝五寸按之。

庶右手足、當踝而彈之。

其應過五寸以上、蠕蠕然者、不病。

其應疾、中手、渾渾然者、病。

中手、徐徐然者、病。

其應、上不能至五寸、彈之不應者、死。

是以脫肉身、不去者、死。

中部、乍踈乍數者、死。

其脈、代而鈎者、病在絡脈。

九候之相應也、上下若一、不得相失。

一候後、則病。二候後、則病甚。三候後、則病危。

所謂後者、應不俱也。

察其府藏、以知死生之期。

必先知經脈、然後知病脈。

7 帝曰、冬陰夏陽奈何。

岐伯曰、九候之脈、

皆沈·細·懸絕者、爲陰、主冬。故以夜半、死。

盛·躁·喘數者、爲陽、主夏。故以日中、死。

是故、寒熱病者、以平旦、死。

熱中及熱病者、以日中、死。

病風者、以日夕、死。病水者、以夜半、死。

其脈、乍踈乍數、乍遲乍疾者、日乘四季、死。

形肉已脫、九候雖調、猶死。

七診雖見、九候皆從者、不死。

所言不死者、風氣之病、及經月之病、

似七診之病、而非也。故言不死。

若有七診之病、其脈候亦敗者、死矣。必發噦噫。

必、審問其所始病。

與今之所方病。

而後、各切循其脈、視其經絡浮沈、以上下逆從、循之。

其脈疾者、不病。其脈遲者、病。

脈不往來者、死。皮膚著者、死。

c 帝曰、其可治者奈何。

岐伯曰、經病者、治其經。

孫絡病者、治其孫絡血。

血病身有痛者、治其經絡。

其病者、在奇邪、奇邪之脈、則繆刺之。

留瘦不移、節而刺之。

上實下虛、切而從之。

索其結絡脈、刺出其血、以見通之。

瞳子高者、太陽不足。

戴眼者、太陽已絕。

此決死生之要。不可不察也。

手指及手外踝上五指、留鍼。

d

『甲乙經』卷之四 三部九候 第三

〔口〕… 医統本（内閣文庫）
〔口〕… 明藍格抄本

3 黃帝問曰、何謂三部。

岐伯對曰、上部、中部、下部。

其部各有三候〔部〕、三候者、有天、有地、有人。

a 上部天、兩額之動脈。上部地、兩頰之動脈。上部人、耳前之動脈。
中部天、手太陰。中部地、手陽明。中部人、手少陰。
下部天、足厥陰。下部地、足少陰。下部人、足太陰。

下部之、

天以候肝、地以候腎、人以候脾胃之氣。

中部之、

天以候肺、地以候胸中之氣、人以候心。

上部之、

天以候頭角之氣、地以候口齒之氣、人以候耳目之氣。

〔此〕三部者、

b

三而成天、三而成地、三而成人。

三而三之、合爲九。

九分爲九野、九野爲九藏。

故神藏五、形藏四、合爲九藏。

五藏已敗、其色必夭、夭必死矣。

4

〔黃帝問〕曰、以候奈何。

〔岐伯對〕曰、必先度其形之肥瘦、以調其氣之虛實、

實則瀉之、虛則補之。

必先去其血脉、而後調之、無問其病、以平爲期。

5

〔黃帝問〕曰、決死生奈何。

〔岐伯對〕曰、形盛、脉細、少氣不足、以息者、危。

形瘦、脉大、胸中多氣者、死。

形氣相得者、生。參伍不調者、病。

三部九候、皆相失者、死。

上下左右之脉、相應、如參春者、病甚。

上下左右、相失、不可數者、死。

中部之候、雖獨調、與衆藏相失者、死。

目內陷者、死。

6

〔黃帝問〕曰、何以知病之所在。

〔岐伯對〕曰、察九候、

獨小者病。獨大者病。獨疾者病。獨遲者病。

獨熱者病。獨寒者病。獨陷下者病。

以左手、於左、足上、去踝五寸、而按之。

以右手、當踝而彈之。

其應、過五寸已上、蠕蠕然者、不病。

其應、疾中手渾渾然者、病。

中手徐徐然者、病。

其應、上不能至五寸、彈之不應者、死。

脫肉、身不去者、死。

中部、乍疎乍數者、死。

代脉而鉤者、病在絡脉。

九候之相應也、上下若一、不得相失。

一候後則病、二候後則病甚、三候後則病危〔死〕。

所謂後者、應不俱也。

察其府藏、以知生死之期。

必先知經脉、而後知病脉。

眞藏脉見者、邪勝、死〔也〕。（『素問』無死字）

足太陽之氣絕者、其足不可以屈伸。死、必戴眼。

7

〔黃帝問〕曰、冬陰夏陽奈何。

〔岐伯對〕曰、九候之脉、

皆沈·細·懸絕者、爲陰、主冬。〔故〕以夜半死。

盛·躁·喘·數者、爲陽、主夏。〔故〕以日中死。

寒熱病者、以平旦死。

熱中及熱病者、以日中死。

病風者、以日夕死。病水者、以夜半死。

其脉乍數乍疎、乍遲乍疾者、以日乘四季死。

形肉已脫、九候雖〔調者〕、猶死。

七診雖見、九候皆順者、不死。

所言不死者、風氣之病、及經月之病。

似七診之病而非也。故言不死。

若有七診之病、其脉候亦敗者、死矣。必發噦噫。

必審問其所始病、

與今之所方病。

而後〔素問〕下有各字、切循其脉、視其經絡浮沈、

以上下逆從〔順〕、循之。

其病〔脈〕疾者不病、其脉遲者病、

不往不來者、死〔素問〕作不往來者。皮膚著者、死。

8

〔黃帝問〕曰、其可治者奈何。

〔岐伯對〕曰、經病者、治其經。

絡病者、治其絡（『素問』二絡上有孫字）。

身有痛者、治其經絡。

其病者、在奇邪、奇邪之脉、則繆刺之。

留〔普〕瘦不移、節而刺之。

上實下虛、切而順之。

索其結絡脉、刺〔出〕其血、以通其氣。

瞳子高者、太陽不足。

戴眼者、太陽已絕。

此決死生之要。不可不察也。

d

